EU-日本学講義（実験講義、映像）
実施日：2008 年 11 月 18 日、25 日
担当者：映像文化専修　菅原慶乃

本講義の目的は、「日本」を研究対象とする受講者たちが、自らの研究対象や研究姿勢を相対化するための様々な話題を提供することであった。講義内容は、ナショナルな枠組みにもとづく地域研究が時に色濃く帯びるオリエンタリズムやナショナリズムにかんする諸問題を、キャメラで撮影する/される行為や映画を見る/見られる行為と関連づけながら講じる、というものだった。

前半部分では、“ジャパニメーションが世界を席巻している”という一部の言説が帯びるナショナリズムを手がかりとして、国家のイデオロギー装置（L.アルチュセール）として機能する国民文化論の諸問題を論じた。そして、“国民 nation”概念が、「想像の共同体」（B.アンダーソン）による“視線の共有行為”により大いに強化されたことを、『国民の創生』(1915)や、B.ブロスキー社の『Beautiful Japan』(1918)等の作品を通じ具体的に確認した。さらに、西洋近代の“国民の視線”がアジアという他者を描く際に意図的に明確な形で差異が可視化されるような演出が目論まれた事を、『散りゆく花』(1919)等の事例を取り上げ説明した。

後半部分では、中国映画における日本人表象の変遷について四つの作品を取り上げ、それらがその時々の国家イデオロギーを如実に反映していることを確認した。まとめとして、イレデンティズムを中核として展開してきた中華ナショナリズムにとって、明確に識別できる“敵”の設定が必要であったことを、「オクシデンタリズム」（Xiaomei Chen）という概念の紹介を通じて講じた。